

東大寺東塔院の調査

—第589次

1 はじめに

東大寺では、『東大寺境内整備基本構想』にもとづき、2014年度から「東大寺境内史跡整備第一期計画」として、境内整備事業を開始した。その一環として、東大寺、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）および奈文研により、史跡東大寺旧境内発掘調査団を組織し、2015年度以降、境内史跡整備事業に係る調査として東塔院跡の発掘調査をおこなってきた。2015・2016年度には、おもに東塔基壇の発掘調査をおこない、奈良時代の創建塔と鎌倉時代の再建塔の両基壇および塔の規模や構造に関するデータを得たほか、平安時代の大規模な改修の痕跡も確認した¹⁾。今回の調査は、東塔を取り巻く回廊および門の規模や構造の解明を目的とし、東大寺旧境内第172次調査（奈文研平城第589次）として実施した。

今回の調査では、5～7区の3か所の調査区を設定した（図265）。5区では南門のほぼ全域と南面回廊の一部を対象とし、創建、再建基壇と基壇外周の様相把握を目的とした。6区では東塔院東門の位置と遺存状況の確認、7区では西門の位置と遺存状況の確認のほか、東塔基壇西辺の遺存状況の確認を目的とした。調査面積は合計598.5㎡（5区：438.5㎡、6区：74㎡、7区：86㎡）で、調査期間は2017年7月19日～11月22日である。

2 東塔院の沿革

東塔院は、大仏殿院の南東に位置し、七重塔とそれを囲む回廊などからなる。『東大寺要録』や正倉院文書などによると、塔は天平宝字8年（764）頃に完成していたとみられ、回廊の造営もほぼ同時に進行していたようである。治承4年（1180）、平重衡の南都焼討により、東塔院は東大寺の他の堂宇とともに灰燼に帰す。その後、大勧進重源により東塔院の再興が企図されるが、その完成を見ずに重源は入滅する。再興事業は第二代大勧進の栄西、さらに第三代行勇へと引き継がれ、1220年代に塔は一応の完成をみたようである（『百鍊抄』・『明月記』）。これにやや遅れて回廊も再建されたと目される。しかし、この再建の塔も康安2年（1362）に雷火によって焼失し

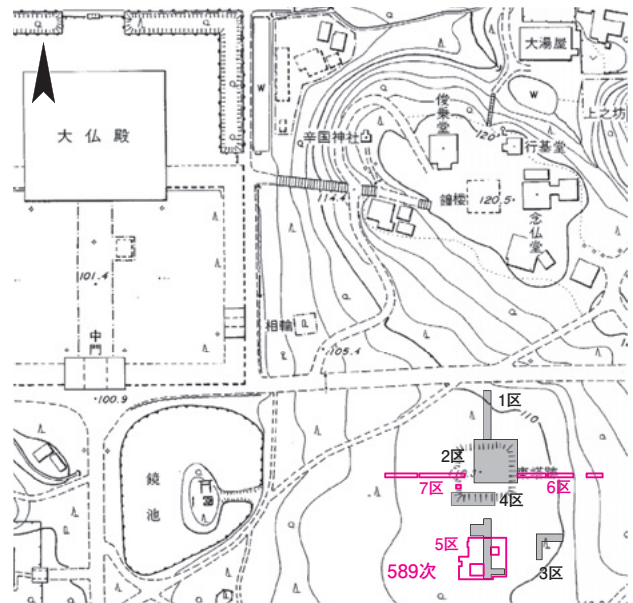


図265 第589次調査区位置図 1：800

た（『嘉元記』）。

調査前の東塔院跡は、塔基壇の高まりの周囲が概ね平坦であるのに対し、その外側は塔基壇をコの字状に取り囲むように東方で標高がやや高く、西方は緩やかに下る地形であった。南門周辺の現地表は、塔基壇南辺と比べて約50cm高い平坦面をなす。なお、2016年度の調査では、南門の南北雨落溝と想定される溝を検出し、梁行規模を約14mと想定した。

3 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、南門および南面回廊、東門と西門基壇、東塔基壇である。このうち、東門と西門では、ともに基壇と考えられる土とその周囲の瓦溜を確認したほか、西門東面では瓦溜の下に石敷が遺存することを確認した。これらは東西両門に関わる遺構である可能性が高いが、詳細は今後の調査に期したい。以下では、南門および南面回廊とそれに付随する遺構について詳述する。図266に5区の遺構平面図を示す。

再建南門 5区において、再建南門の礎石抜取穴を、樹木により調査できなかった部分を除いてすべて検出した。礎石は残存しない。再建南門は桁行3間、梁行2間の東西棟礎石建物である。規模は桁行約12.9m（中央間15尺、両脇間14尺）、梁行約7.2m（12尺等間）。軒の出は南北ともに約3.6m（12尺）と推定される。東西には南面回廊が取り付く。それぞれの礎石抜取穴の平面規模は1.3～1.6



図266 第589次調査5区遺構図 1 : 150

m、深さは検出面から30~40cm。ロ二、ハ一には根石が残る。

再建南面回廊 南門との取り付け部分を東西で1間分ずつ検出した（東2の礎石列は調査区東壁の断面観察による）。南門と同様に抜取穴を検出した。礎石は残存しない。南面回廊は複廊で、梁行は約6m（20尺）。柱間寸法は桁行、

梁行とも約3m（10尺）等間と推定され、軒の出は南北ともに約2.7m（9尺）と推定される。それぞれの礎石抜取穴の平面規模は1.1~1.4m、深さ30~50cmで、南門よりもやや小さいが深い傾向がある。東イ1には根石が残る。

南門、南面回廊基壇上面には鎌倉時代の瓦を含む、再建建物廃絶後の堆積層を確認した。これにより礎石の据

付掘方は土層断面のみでの検出にとどめた。

再建南門・南面回廊基壇 南門および南面回廊の基壇は一体で造られる。両基壇は、南門と南面回廊との東西の取り付け部分で屈曲部を捉えたものの、基壇外装は南門南面の一部に痕跡をとどめるのみであり、規模の正確な数値は示しえない。基壇高は北雨落溝の底面から最大で約1.2m、南雨落溝の底面からは約0.5mであるが、後述するように南門東半の南雨落溝は再建直後には存在していないと考えられ、基壇南辺はかさ上げされたともみなしうる。なお、現在は南門、南面回廊の両基壇上面がほぼ平坦であるが、礎石抜取穴は南門が浅く南面回廊が深い傾向があるため、本来南門の基壇のほうが高かった可能性がある。

基壇周囲には外装材は残存しない。北面ではその抜取痕跡も確認できておらず、北雨落溝の瓦の堆積以前に外装材は抜き取られたか、または石材の破砕片も認められないことから元来存在しなかったとも考えられる。一方、南門基壇南面では幅30cm程度の東西の溝状遺構2条を検出した。これらは、それぞれ地覆石据付掘方とその抜取痕跡とみることができる。断割調査によると、これら2条の遺構の直下に、別の2条の溝状遺構を確認して



図267 南門・南面回廊の北雨落溝（南東から）

おり、後述する南雨落溝の改修痕跡を根拠とすると、重複関係の古い方の溝状遺構が再建当初の地覆石据付掘方とその抜取痕跡であると推定できる。

再建南門・南面回廊の雨落溝 基壇の南北で確認したが、北面と南面とで様相が異なる。北雨落溝は南面回廊と南門基壇に沿う最大幅約2.3mの素掘溝。深さは北側の検出面から約50～75cm（図267）。溝内からは、軒瓦を含む鎌倉時代の多量の瓦が密集して出土したほか、炭化部材や鉄釘、壁土とみられる白土付きの焼土片などが出土した。また北西隅部では鬼瓦と鳥衾瓦が近接して出土するなど、建物倒壊時の状態をある程度とどめている可能性がある。廃絶時期は出土土器から南北朝期と考えられる。改修等の痕跡は認められない。なお、この北雨落溝には北（東塔側）からの溝が接続する可能性がある。

南雨落溝は、南門の東西で様相が異なる。東方では南門と南面回廊との東の取り付け部分で南に折れる。西方では断割調査と部分的な平面検出のみだが基壇に沿って参道の西端で南に折れると考えられる。東方のL字の屈曲部は南門基壇東端の延長部分にあたり、雨落溝の西岸に安山岩の垂角礫（径20～40cm）を並べて護岸とする（図268）。規模は幅約2.1m、深さ約30cm。溝内からは北雨落溝と同様に鎌倉時代の多量の瓦のほか、炭化材や鉄釘、焼土片などが出土した。この東方の南雨落溝は、鎌倉時代の瓦を含む堆積土（白色粘質土）とその上層の整地土を掘り込んでいる。南門南雨落溝の掘削が塔再建に遅れるなどした場合、整地土に鎌倉時代の瓦が混入する可能性は捨てきれないが、白色粘質土が自然堆積と考えられ



図268 南門・南面回廊の南雨落溝（南から）

ることを根拠とすれば、再建当初ここには掘り込みをもつ雨落溝が存在せず平坦面であった可能性がある。

再建南門の階段 階段の痕跡は明確ではない。しかし、基壇北辺の中央で安山岩礫（径20～30cm）を数石検出しており、この部分が階段に関わる可能性がある。一方、南辺では参道縁石の石列を検出したのみで、階段は存在しないか削平された可能性がある。

参道 南門基壇南面に取り付く。東西両縁に安山岩や花崗岩、凝灰岩の切石（長さ20～80cm）を並べて縁石とする（図269）。参道幅は東西端間で約4.5m（15尺）で、南門の中央間の規模と一致することから、再建建物の参道と考えられる。この参道は、先述の南雨落溝と同様に鎌倉時代の瓦を含む整地土の直上に構築されており、その構築時期は南門東方の南雨落溝改修時と同一時期である可能性が高い。この参道廃絶後に新たに参道がつけられる（図269）。玉石状の礫（径10～15cm）を南北に2列並べて縁石とする。参道幅は約2.3m。構築時期は不明であるが、再建基壇廃絶後のものと考えられる。

創建南門および南面回廊 南門、南面回廊とも建物に関わる痕跡は確認できていない。ただし、基壇に関しては基壇北西の断割調査により基盤層の落ち込みを確認し、南西端の断割調査では奈良時代の瓦のみを含む溝状遺構を、基壇中央の断割調査では鎌倉時代の瓦を含む白色粘質土層の直下に溝状遺構を確認している。これらの遺構や落ち込みは確実に再建基壇を遡る痕跡であり、創建基壇に関わる可能性が高い。



図269 南門に取り付く参道（南から）

4 出土遺物

整理用コンテナ800箱分の瓦片（丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬘斗瓦・鬼瓦・鳥衾瓦・雁振瓦・道具瓦）が出土した。大部分は鎌倉時代のもので、割合は少ないが奈良時代のものも認められる。鎌倉時代の南門、南面回廊の南北雨落溝からは倒壊にともなうと考えられる瓦が多量に出土したほか、基壇上面を覆う後世の堆積土中からも数多く出土した。そのほか整理用コンテナ4箱分の土器片（土師器・須恵器・瓦器等）や、鉄釘や鉄鋸などの鉄製品も200点以上出土した。これらの多くも南北雨落溝から出土した。

5 まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の再建南門および南面回廊の建物の規模をあきらかにし、基壇の平面規模や構造を検討するためのデータを得た。再建南門は桁行3間、梁行2間の礎石建物、同南面回廊は梁行2間の複廊として復元できる。これらの礎石採取穴の配置は、江戸時代の『東大寺寺中寺外惣絵図并山林』（17世紀）に描かれた礎石の配置に一致する。東塔とは異なり基壇外装は認められなかったが、南門、南面回廊の雨落溝の構造があきらかになったことは、特筆すべき成果である。その様相は南門の南北で異なっており、北面では南面回廊と南門に一連の雨落溝が設けられているのに対して、南面東半では南門と南面回廊の取り付き部分で、L字に折れることがあきらかとなった。このL字溝は、南面中央の参道とともに、再建当初ではなくやや遅れて開削されたものと考えられる。この開削の背景には、南門東方からの雨水処理に対する改善の意図があったと想定され、東塔院全体の排水計画を考える上でも重要な知見である。

一方で、未解決の課題も数多く残っている。創建期の基壇および建物に関しては、ほとんど情報が得られていない。また、創建以前の地形に関する情報も不足している。南門基壇がいかなる地形にどのように構築されたかを含めて、次年度以降の課題である。

（芝康次郎・神野 恵、南部裕樹・福田さよ子／東大寺、
廣岡孝信／樞考研）

註

- 1) 東大寺『東大寺東塔院跡』東大寺境内整備事業調査報告第1冊、2018。